

学位論文内容の要旨

学位申請者	<p style="text-align: center;">范 文玲</p> <p style="text-align: center;">【比較社会文化学専攻 平成23年度生】</p>	要 旨
論文題目	<p style="text-align: center;">郁達夫小説に見られる西洋への憧憬——女性表象を中心に——</p>	<p>本論文は中国近代文学を代表する作家の一人郁達夫（1896～1945）について、大正期日本への留学経験を通じて吸収し、憧憬の対象とした西洋近代の思想文化、文学が彼の小説にどのように具体的に反映されているかを、女性表象を中心に明らかにし、郁達夫の文学において西洋近代が持つ意味を再考しようとするものである。類似したテーマの先行研究の多くが限られた作品に対する考察を通じた印象批評的なものに終始する中で、全小説の用例調査に基づいた分析と考察を行っている点にまず本研究の特色がある。さらに、本論文修正後により明確になった特色としては、郁達夫が西洋近代を受容する場となった近代日本における西洋近代受容のあり方との比較という視点を有する点も本研究にのみ見られるものではないにせよ、特色として挙げることができる。本論文は序章・本文（五章）・終章により構成される。序章では、本論文の目的を論じ、先行研究の紹介を行う。第一章では、郁達夫の代表作である「沈淪」に見られる作者の西洋思想・西洋文学からの影響および西洋崇拝を、主人公の自殺という結末から検討する。第二章では、郁達夫小説で多用されている西洋言語に着目し、郁達夫小説の中国文体史における貢献を論じる。第三章では、郁達夫小説に描かれた女性の身体的・外見的特徴に着目し、そこに見える郁達夫の西洋崇拝を指摘し、続く第四章で、郁達夫と同じく留日経験のある創造社のメンバーである張資平、郭沫若、成仿吾、陶晶孫らによる女性の外見描写を分析・比較し、第三章で指摘した郁達夫小説における女性の身体描写をより明確に特徴づける。第五章では、第三・四章に続いて、同じく女性である母親像に着目し、マイナスイメージの母親像の描写に見える西洋文学からの影響を指摘する。そして終章で、本論文全体を通しての結論を述べる。初期作品で描かれた西洋的な女性美はいわゆる「健康美」ではなかったことの説明を、本論文は郁が作品に込めようとした感傷性に求める。そしてその感傷性は、男性主人公に読者の哀れみの視線をうながす仕掛けであり、作家の創作戦略であると主張する。現に、1920年代後半から40年代にかけて、『婦女雑誌』等のメディアで、健康美の提唱・病的な美に対する批判が行われるようになると、郁の作品から女性の病的な美が減り、健康的な女性が描かれるようになる。とはいえ、作品全体の感傷性は保たれるという、自己表現と読者期待の複雑な絡み合いを示唆する。そのあたりは、日本をゲートウェイとして受けた西洋からの影響の性質についての考察と共に、今後の課題として挙げられている。</p>
審査委員	<p>(主査) 教授 宮尾 正樹</p>	
	<p>教授 和田 英信</p>	
	<p>教授 岸本 美緒</p>	
	<p>教授 伊藤 美重子</p>	
	<p>准教授 伊藤 さとみ</p>	